

Q. 9 教師の話し方で留意することは何ですか。

A. 教師が子どもたちに何かを話したり、指示を出したりすることは、とても大切な指導技術の1つです。場面に応じた『声の大きさ』『目線』『場面をイメージできる話の構成』の3つを心がけましょう。この3つのことに併せて、子どもたちにとって納得できる内容を考え、伝えていくことがポイントになります。その場合、話し手の顔の表情や語尾の言い回しなどによっても、相手に伝わる印象が異なることに留意しましょう。



○声の大きさ

子どもに問いかける声の大きさは、状況に応じて使い分けることがポイントになります。『指示』は、皆に気付かせるようにするために、はっきりと通る『大』の声で行い、子どもの説明に対して補足を入れるなど、考えをより深めさせる場合は『中』の声を使います。そして、個別指導の時は『小』の声で子どもに寄り添うような声かけをするように心がけましょう。

声の出し方には『強弱』とともに『高低』や『速さ』も加味しながら、聞き手を意識した話し方を身に付けましょう。【Q. 11 参照】

○目線

子どもたちにしっかりと話の内容を理解させたい時は、教師自身が背筋を伸ばし、凛とした態度で伝えたいものです。それは、子どもたちの目線が少し上に向くようにするための配慮の1つです。

授業における個人指導等の場面では、子どもが安心して「わからない」と言えるようにするために、子どもと同じ目線にするようにしましょう。そして、話しにくそうにしている子どもの思いを聞きたい時は、指導者の目線を子どもの目線より少し低くしてみることもポイントの1つです。

しかし、目線を配るという指導技術のみにこだわるのではなく、日々のかかわりを通して、子ども一人一人や学級全体の状態を見ながら実践していくことは言うまでもありません。

○場面をイメージできるような話の構成

教師が子どもに話をする場合、何気なく話をしたり、支離滅裂な話をしたりするなど、教師の思いのみで話を進めてしまうことがあります。この場合、話の内容は何となく伝わりますが、より深く子どもの心の中に伝わっていくことは期待できません。

子どもたちも大人も自分のイメージをもつと、適切な行動ができたり、しっかりと自分の意思で考えたりすることができるようになります。

そのためには、時系列で話をすることや、『状況』を表す言葉を入れることが大切になるでしょう。例えば、「正門の前は、大きな道路でたくさん車が来ているよね。だから、下校の時に急いで正門を出ると、どうなるのかな？」と問いかけをします。このように、意識してわかりやすく伝えようとすることで、子どもへの話し方が変わっていくことでしょう。そのことが子どもにとっての『話し方のモデル』にもなります。【Q. 17 参照】

1日の教育活動の中で、『話すこと』を通して児童生徒に様々な内容を伝える機会が多くあります。時には、注意等を促す場面もあるでしょう。その時に、「この内容は全体で話すことが適切なのか？」や「違う場所で個別に対応することが必要か？」など、場面や状況を十分に見極めて話すことが大切です。



『きく』ことの大切さ

教師は、授業や諸活動を通して、子どもの思いや考えを『きく場面』が多くあります。ともすれば、自分本位の『きき方』になってしまうことで、子どもの本音をつかみ損ねてしまうこともあるのではないのでしょうか。



話し方に併せて、『きき方』についても振り返ってみましょう。

三つの『きく』

- ①聞く (hear) 受動的受信＝聞こえてくる音を聞く
- ②聴く (listen) 主体的受信＝注意深く聞く、傾聴する、判断する
- ③訊く (ask) 主動的受信＝たずねる、確かめる、インタビューする

受けとめ、うなずき、受け入れる

○優れた聞き手が、優れた話し手を育てる

話をきく時には、受容的な態度をとることが大切です。内心では「それは違うのではないか」と思っても、すぐに反論したりせずに、まずは受けとめ、うなずいて話の内容を受け入れることが大切です。その際には、相手が何を言おうとしているかを汲み取るようにしましょう。

話し手が「この人は、私の話を真剣に聞いてくれている！」と受容されているように感じると、話し手は、安心して言葉を続けることができます。そして、安心して思いのたけを語ることによって、自分の気持ちに気付いたり、新たな視点で物事を考えたりすることができるものです。そういった意味からすると、話の内容をどれほど深めていけるかは、聞き手の技量によるところが大きいと言えます。

○子どもの話はすぐに否定しない

相手を受容するという基本は、当然ながら、子どもを指導するときにも当てはまります。子どもを諭すとき、感情的な反発が残るようでは、指導が成功したとは言えません。いくら正論を展開しても、自分の思いや考えを撥ねつけられたら、説得は失敗に終わってしまいます。頭ごなしに指導するのではなく、子どもの言い分を一旦受け入れ、内面で十分に吟味することが大切です。

このような教師の姿勢が、子どもにとっての『きき方』の手本となるでしょう。